

観光地としての東京

山本光正

Tokyo as a Tourist City

はじめに

- ① 東京の案内書の刊行と東京見物
- ② 滞在型の東京見物
- ③ 東京市民の行楽
- ④ 学校関係編纂の東京・京都の案内書

おわりに

[要約]

本稿は明治から大正にかけての東京の観光及び東京人の行楽について考察したものである。東京は江戸の時代から現代に至るまで、観光地としての側面を持ち、多くの人々が訪れているが、ここでは、観光地東京を考察するための主たる資料として、東京の案内書を利用した。

明治期の東京の案内書出版には何回かの波があった。最初は明治四年における大区小区域の実施、ついで同十一年における郡町村制に伴う東京の一五区六郡改変時、そしてもっと多くの案内書が出版されたとみられるのが、二十二年の東海道線の開通と翌二十三年の第三回国勧業博覧会である。明治四十年には東京勧業博覧会が開催されるが、この時東京市は大冊の『東京案内』上下二冊と、携行用の『東京遊覽案内』を出版している。なお前者は近代東京の地誌として現在も高く評価されている。以上の案内書の出版時期と一時的に多くの観光客が訪れた時期とほぼ合致している。

ようだが、明治も後期になると一週間前後東京に滞在する観光客が増加した。それは地方から東京に定住した親類や、下宿した子供のところに泊まるようになったためである。さらに東海道線の開通により東京以西からの観光客も増加したであろう。

明治三十年代後半からは東京住民のための行楽案内が出版されるようになった。近世以来の行楽地は近代にも利用されたが、市街地の発展により「情緒」のないものとなり、地方からの定住者も新たな行楽地を求めだした。こうした時期に国木田独歩の『武藏野』が発表され、大町桂月は『東京遊行記』を著している。大正期に入り田山花袋が『東京の近郊』『一日の行楽』を出版するに及んで、現在の中央線・京王線を中心とした東京西部が『武藏野』として注目され、行楽地として発展していった。江戸の文人墨客が作り上げた行楽地に対抗するように、新しい知識人が行楽地を作り上げていったわけである。